

捕虜の身の悲しさ

新潟県 周 佐 吉 三

我が陣第二九九六部隊第八〇大隊は戦況により外蒙付近の開遼から引き揚げ奉天駅で終戦を知りました。その後我が部隊は九月三十日に満州の黒河に集合させられ、ソ連兵の説明では、ヤボンスキーはナホトカ経由でダメイするから一週間くらいの食糧を持って行くように指示がありましたので、本当にこれで日本に帰れると思います、そこで満州の紙幣は不要と思ひ全部物々交換をして、いよいよ黒龍江を渡りナホトカ港へ帰るものと思つていました。

ソ連領のクイブシエフカで持つて来た食糧を一か所に集め、有がい車の二段仕立の貨車に四十人ずつ乗して我々は一路ナホトカへ向かつて南へ走っているものと思つていましたが、夜になって貨車の扉から星空を見ると、なんと北へ走っている感じで、みんな口々に北斗星

がだんだん近づいてくるぞという声で、あだまされたぞ、我々は捕虜になった。どこへ連れていかれるのか、また何をされるか、帰ることができないか、みんなで話合つてはだまされた悔しさと、行き先不安が募るばかり、何しろ他国ソ連領です。輸送中我々の食糧は、赤い皮のついたコウリヤンを受領して、それを駅の引込線でまきを集めて飯ごう炊飯し、終わると出発、貨車の中で食べます。ふだんこれは馬の食べ物が今度是我々の主食とは、捕虜の悲しい生活が始まりました。十月八日午前十時ころと思ひますが、有刺鉄線の囲いのあるチェレンホーヴォ捕虜收容所の前で、私物の検査をされ、印かん、預金通帳、手帳等の私物を没収されました。捕虜收容所では、全員番号がつけられました。私は一五七八号と呼ばれました。いよいよ捕虜收容所の生活です。

我々より先に到着していた他の部隊兵も多くなりました。また我々の後日も、他の部隊不明ですが、続々入所してその冬最後で、四千人以上と聞きました。

收容棟は大きな床板張りの倉庫のような建物で、両側に二段つくりの寝台です。一棟に約二百人くらいの收容

でした。全部で二十五棟あり、その他炊事場、病棟、床屋、浴室等ありました。便所は新しくつくりました。長さ二十メートル、幅五メートル、深さ四メートルくらいの上に、大きな木を横に渡し便所を建造したものです。

入所の翌日から早速我々の食糧となるキャベツの運搬作業がありました。キャベツ倉庫まで片道約三キロくらいの道中、銃剣を持ったソ連兵が一人ついて来ました。我々は外套のすそをまくり、大きなキャベツを五個くらいずつ運搬する道中、ソ連兵に見えないようにして、生キャベツを取り出して食べましたが、最初はよかったです。だんだん青臭いのと、甘いやらで捨てるにも、ソ連兵がいるので捨てられぬので、とうとう無理してよいところだけ食べました。なんとしても生きて帰るためには、背に腹はかえれぬという気持ちになりました。

こんな作業が春まで続きましたが、その後炭坑の作業に変わり私たちは棟も変わり、炭坑の作業する人たちと住むようになりました。炭坑の作業は、八時間労働の三交代制ですから、各作業班ごとに建物の両方の出入り口に一人ずつの泥棒除けの不寝番を一時間交替で勤務する

ことでした。

私たちの収容所から作業場まで約一キロくらいの近いところに露天掘りの炭坑があります。その炭坑は、白カバ林を切り開いて、地中に大型ハッパをかけた後、電気 で動く特大シヨベルカーで土を貨車に積み込み、どこかに運びます。

土を取り除いた後は、黒光のする石炭の層があり、その厚さが何と三十メートルくらいあります。その最下位のところに石炭を選別所へと運ぶベルトコンベヤーが据えつけられています。坑内は広大で作業班は何組にも分かれています。

ドイツ人、ソ連人、日本人と人種もいろいろです。石炭運搬用の貨車の引込線が何本もあり、各選別所には二十トンの無がい車が配車され、満車になるとまたかわりの貨車が配車されます。各作業班は三十人二交替で八時間労働のノルマは確か二十トン貨車満車で一〇〇%です。石炭の採掘場は長さ五十メートルくらい、奥行き三メートルくらいあります。石炭と石炭の間にパロードといって泥炭の層があります。それは固くして粘土を押し

たようなものです。それをツルハシと炭スコップで取り除くと、今度はロシヤ人のハッパ係の人が来て、長さ一メートル、電気ドリルで二メートル間隔おきに石炭に穴を開けて、ダイナマイトを差し込んで、最後に導火線に自分のタバコの火で点火してから安全なところへ待機する。大事なことは、ダイナマイトの数が何本爆発したかを数えることです。全部爆発が終わると、ハッパ係の合図で仕事にかかるのですが、まず最初はコンベヤーに山盛りになっている石炭の中に若干ではありますが、泥炭が混じっていますから、それを急いで取り除く作業が大事で、その後は大きな石炭用のスコップで下のベルトコンベヤー目がけて石炭を投下する作業になります。

下から吹き上げる石炭の粉で、顔や鼻の穴や手等は真っ黒になります。次の交替の組に作業を申し送るので、この作業は三交替制ですから、一週間交替で繰り返している。

シベリアの気候は五月ごろ三十センチくらいまで土が解けてきますが、種まきは六月ごろ、コルホーズから馬鈴薯の種まき植え作業があります。七月は短期間です

が、夜十一時三十分には作業班の整列時間ごろ外で新聞も読める明るさです。また冬は粉雪で二センチくらいで、寒さは厳しく体感温度風速一メートルで一度下がるので、六十度になると鼻の先が白く凍傷になるので、相手の鼻を見合わして確かめます。

私はこのような体験で無事帰れた。四年間の生活は長かった。

生きて帰ろう

高知県 清水 清助

昭和十四年に渡満し、北安省克山県公署に勤務していた。

ところが、終戦の二十五日前に、最後の国民兵召集にかかり、チハルの工兵第一四九連隊に入隊した。そこで突然、ソ連軍の空襲を受けたのが終戦の四、五日前、わけのわからぬうちにソ連軍によって武装解除され、チハルの兵器廠へ収容された。